



「旅について」



『徒然草』の中で、兼好法師は旅について、こんな感想を書き記しています。

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目覚むる心地すれ。

(どこでもいいが、ちょっとした旅をすると、目が覚めるような新鮮な気持ちになるものだ。)

みなさんの旅の思い出は、どんなものでしょうか。もしかすると、小学校・中学校時代の修学旅行の思い出が、強く印象付けられているかもしれません。しかし、もう少しすると、気の合う仲間との旅の思い出、あるいは気ままな一人旅の思い出が加わってくる可能性があります。いずれにしても、旅は日常の生活から離れた非日常の世界に人を誘い、兼好法師の言う「目覚むる心地」を味合わせてくれるものではないかと思われま

ある詩人は、旅について、その詩の中で、こんな表現を試みています。

一つの旅は、行きと帰りの、二つで一つの旅だ。

(長田弘『秘密の味』)

確かに、旅には、旅先に行く時だけでなく、旅先から帰って来る時の、それぞれ別の思いがあるのではないのでしょうか。これから、どんな所へ行くのか、どんな人と出会うのか、どんな風景と巡り合うのかといったことを思い浮かべながら、もうすでに旅は始まっています。そして、旅先から戻って来る時の、たとえば新幹線の車中で、旅先で出会った様々な思い出を思い返すことも、旅の一部分なのです。旅は行きと帰りの二つで成り立っているという詩人の考えに肯いてしまいます。

現代では、旅の方法も様々な形を取るようになっていきます。新幹線の旅もあれば、飛行機の旅、車や船の旅など、方法もまた多様性を帯びたものになっています。しかし、その根本は、兼好法師の昔から今に至るまで、変わっていないような気がします。旅は「目覚むる心地」がするものなのです。

そして、しばらくの間、旅を経験した後で、再び、日常生活に戻ることで、これまでの日常生活とは違った気分になるものと思われま

人生には様々なキーワードがあると思いますが、「旅」という言葉は、みなさんにとっての大事な言葉として取っておいてほしいと思います。

同時に、旅＝人生という考え方も、折りにふれて考えてほしいと思います。人が生きていく道筋や様々な出会いを「旅」という言葉に関連付けることは、生き方の大事なヒントになるのではないのでしょうか。